



絶対平和主義

大分メノナイト・キリスト教会
牧師 佐々木淳一

私は今、大分市内にあるメノナイト教会の牧師をしています。十字架の上から、赦しを祈られました。

「メノナイト」は、宗教改革で誕生したプロテスタントの一派となります。この方に全身全霊を献げて従えど、改革者たちは説いたのです。

「宗教改革者たちは、口々に『聖書に帰れ』と説きました。ところで、人々は始めて聖書を読み始めたわけですが、聖書に記されているイエス様は、町々村々を巡り歩き、人々の病を癒し、御言葉を語り、愛を説いて回ったのです。イエス様は最後に十字架へ付けられましたか、

「キリスト教社会、普通」コッパは国家と宗教とが離れがたく結びついている社会です。ルプス・クリスチアヌス」と言います。そのような社会にあっては、国家が、いざ戦争となれば、宗教は全面的に戦争を支持する役割を担います。「この戦いは正義の戦いだ」とか「この

り、でう。よ。う。高橋哲哉
か、をう。めよ。う。高橋哲哉
「前夜”を信じよう。
ま、ことおを確かめよう。
は、故におを確かめよう。
混迷は深まるばか、り、でう。よ。う。高橋哲哉

日本国憲法 第9条
日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

戦いに神の祝福があらんことを」というメッセージが教会から発信されるのです。
しかし、本当にイエス様はそんなことを望んでいるのだろうか。
聖書に書かれているイエス様と、人々が殺し合う戦争とは、どうやっても結びつくことのないものでした。
「イエス様に従う」、そのことを決意した我々の歩みはどうあるべきか、おのずから見えてきます。それは絶対平和主義、非戦、非暴力以外にはあり得ないものでした。
メノナイトの信仰を言い表した「われらの信仰箇条」から一部を読みみましょう。

「キリストの弟子である者は、自分をのろう者を祝福し、自分を憎む者に善を行ない、自分に暴行を加え、迫害する者たちのために祈るべきである。(略)
こういうわけで、人を死に至らせるような武器を使用したり、戦争を押し進めて敵を破壊させたりすることは、イエスに心から従う者にとつては全くふさわしくないことであり、それゆえにこれらのことが許されていないことは自明のことである」
しかし、この信仰告白に生きるということが、どんなに困難であったかを想像してください。たとえば65年前の国で、戦争反対と言えどいつの時になつたのか。状況はいつの時代でもどこの国でも同じです。メノナイトの信者は捕らえられ、拷問され、殺されたのです。メノナイトの信者達は、そのために家を捨て、国を追われ、異国の地を彷徨い歩かなければなりません。

私に洗礼を授けてくださったカナダ人宣教師デルクセン先生も、奥様のマリア先生も、そんな歴史を持つメノナイトの末裔でした。
ある日、先生が私に言いました。「戦争に反対と言った

ために、兵役を拒否したために、殺されたことはあった。国を追われたこともあった。

しかし、父も母も、兄も姉も、人を殺したことは一度もなかったのだ」と。

私には驚きでした。この血に塗られた人類史に、5000年もの間、戦争を拒否し続けてきた一族があったなんて。

そしてこれからも、たとえ

どんな時代が来ようとも彼らは絶対平和、非戦、非暴力を守り抜く覚悟でいる。

最後に、ユージン・ストルツフさんのお証を紹介しましょう。世界の紛争地を歩き、和解のために働いている、彼の平和活動家としての原体験となった話です。

自衛隊の現状と憲法9条を活かす方法

大分県弁護士会・憲法委員会講演会（聴講メモ）

防衛省・自衛隊の危険な兆候

2月20日、標題の講演会が開かれました。県内弁護士その他、市民など200名ほどが集まり、講師の山田朗さんから「自衛隊から自衛軍」に変化しつつある現状を写真や資料を基にお聞かせいただきました。市民が軍事を監視し、コントロールすることの大切さという指摘も受け、メモの形でご報告いたします。

（文責・日野詢城）

私は当時5歳だった。8月15日のことははっきり覚えてる。日本が降伏し、第二次世界大戦が終結した日だ。

その知らせがオハイオ州北東部にある故郷の農村に届いたとき、兄たちは誰も家にいなかった。母がすぐに私に、農作業中の父に知らせに行くように言った。

私は良い知らせだと思った

ので、喜び勇んで全速力で納屋まで走り、「母さんが言っていたよ。戦争が終わったんだ」と、父に告げた。

父の顔に喜びがパッと広がったのを覚えている。父が最初に言ったのは「ああ、良かったな」の一言だった。

遠くで砲声が聞こえた。

「お祝いの音だ」と父が言っ

た。「何のお祝い？」
「戦争が終わって皆が喜んでるんだ」
「どっちが勝ったの？」
「戦争に勝者はいないんだよ」

（ユージン・ストルツフ
CPL・キリスト者平和つくり
チーム・前代表 かけはし90
号2007年10月1日）

2008年11月に報道された「田母神俊雄・元空幕長問題」はショッキングな事件でした。「わが国が侵略国家だったなど」というのはまさに濡れ衣である」というテーマにもとずく、懸賞論文を応募し、94名の幹部自衛官がそれに応えたというものです。政府の見解に

真つ向から反論・旧日本軍の中国侵略などを全面否定する歴史観を現職の幕僚長が示唆し、若手幹部に論文を提出させるというかたちの論陣を張り、集団的自衛権を認めるべきだ等の発言をするなど、言論のクレーダー」とも言える事態を計画的に実施した事件であります。論文の応募に取りかかる以前の2004年、田母神氏は「統合幕僚学校」(高級幹部養成学校)校長時代に、1996年に結成された「新しい教科書をつくる会」の正副会長などを講師

とし「歴史観・国家観」という新しい講座を開設。戦争責任を認める政府見解を「自虐史観」としそれを排除し、国民が誇りに思える歴史観を形成すべきだというカリキュラムが組むなど、緻密な積み上げの上での論文の応募であったと言われている。

たとも言えるこの問題、田母神氏は懲戒免職などという扱いは受けず、定年退職の形で職を辞し、今日も同様の観点での講演活動などを行っています。

自衛隊の「軍隊化」の兆候は、1978年の栗栖弘臣(おみ)統幕議長(とうぼくぎやう)の「超法規発言」(有事にあつては超法規的措置で9条に封印すべし)に始まり、地下でのマガマ活動が続く、それが急浮上し

05年から急速に表面化した憲法改正議論、防衛庁から防衛省へ格上げするなど、1991年の湾岸戦争のPKO活動以降、防衛省・自衛隊内の危険な兆候は、田母神問題を曖昧にする中、新たな段階に入っているといえよう。「軍隊・軍人に名誉がなければ、誰も進んで国を守ろうとしな

も進んで国を守ろうとしな

い」という田母神氏の発言は、1969年「靖国神社を国家が護持しなければ、誰が戦地に赴くのか」という中曽根発言によく似ている。『9条の会にゆーす』16号で、日本基督教団の野口春夫さんが報告した「自衛隊イラク派兵は憲法9条違反」という名古屋高裁の判決(08:417確定)について、田母神氏は「そんなこと関係ない」と言い切ったという。靖国参拝の違憲判決を受け東アジア諸国からの強い批判を浴びる中で、公人としての参拝を見送り続けた中曽根氏との違いが微妙にある。まぎれもなくマグマの上昇と言うことであろう。

軍隊としての

「伝統」と軍備

改憲論に傾斜する人たちの中では「軍・部隊の団結の源泉は〈歴史認識〉にあるとみなされてきた」と言います。航空自衛隊のトップであった田母神氏は、敗戦と東京裁判

で「マインドコントロール」された自衛官はがんにがらめで身動きできないとし、極東裁判を否定、明治以降の海外侵略の歴史そのものを「侵略ではない」とし、「大東亜戦争史」として賛美するわけです。

陸上自衛隊は、第二次世界大戦下の「三国同盟」に批判的であった人が発足時に関わったという経緯があると言います。しかし敗戦をかなり早い時期に認識していたという旧海軍は、旧軍の伝統を海軍上自衛隊に引き継ぎ、国籍を示す旗は日の丸ではなく旧海軍旗を用い、船名も旧軍に使われたものを継承、その戦歴を残すなど「伝統ある部隊は強いのだ」という自己暗示をするというようなことをやっていると言います。

2001年アメリカの同時多発テロ以降、兵器体系(ハード)は対外展開型に大幅に変更されています。冷戦型軍事力から「新たな脅威や多様な事態」への対応が出来

る対処能力を求めるということで、海上自衛隊の総合隻数は増えなくても、新造船のトン数を数倍規模に拡大し搭載武器の新鋭化をはかるなどの軍備の拡大を行っています。たとえば、輸送船から揚陸艦への転換、イージス艦から発射される弾道ミサイルと地上から発射されるパトリオットを組み合わせるミサイル防衛システムの強化などがはかられ、専守防衛から集団的自衛権を行使できる存在になっている。

そうした変化の中でイラクやソマリアへの派兵などが行われ、アメリカの都合で、いびつになる自衛隊の部隊構成で「外から見れば『軍隊』内では、『軍隊』のようなもの」という位置づけに高まる不満と、一般隊員に鬱積するフラストレーションを回避する手段としても「伝統」の名で歴史認識を転換し、「軍人・軍隊の名誉を復活させる」ということが起こっているのだと思います。教科書問題に象徴

される「歴史認識の転換」は、自衛隊内部の問題というものはなく、ある種の国民的なプロパガンダでもあると言え、るのかもしれない。

アメリカの戦略に

対応する自衛隊の変容

1987年に日出台台で行われた「日米合同訓練」はそれまでに実施してきた陸・海・空軍の総合訓練であったと言われます。ほとんど日常化した共同訓練や海外派兵にともない、遠征・輸送・補給能力は飛躍的に向上し(湾岸戦争以来、海上自衛隊の艦船トン数は15倍、ヘリ搭載護衛艦からヘリ空母へ)、弾道ミサイル防衛システムなど、アメリカとの軍事一体化が急速に進んでいます。そうした自衛隊の変容に違憲の判断を下した名古屋高裁の判決にもう一度目を向けるべきだと言います。違憲判断の骨子は「他国の武力行使と一体化した行動」は「自らも武力の行使を

行ったとの評価を受けざるを得ない行動」だということに、あろうかと思えます。

北朝鮮の脅威論に乗せられる形で拡大する日本の軍備拡大は、中国・インド・パキスタンなどアジア全域の軍備拡大の引き金となり、緊張関係が緩和されることにはなりません。世界の潮流は軍縮に向かい、かつての軍事大国であったイギリス・ドイツ・フランス・などは大幅に兵員の削減を行っていることなど、冷戦以降の世界は大きく変化しようとしています。アメリカの一国主義も変化の兆しを見せている中、私たちは戦争の実態(戦争の歴史)をもっと多くの市民とともに学ぶべきであり、アジアにおける軍拡の連鎖を断ち切ることなどの努力をすべきだと…。戦争から平和は生み出されませんが、戦争が生み出すのは戦場の拡大だけです」という戦場からのメッセージをもう一度確かめることができるのかと…。

21世紀の「マスコミ」

「マスコミ九条の会H・Pダイジェスト」より

司馬遼太郎の原作のNHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』が始まった。3人の若い知的エリート(うち2人は陸・海軍の軍人)が青春を謳歌しつつ成長してゆく姿を、ひたすら富国強兵の道を突き進んでいった明治期日本に重ね合わせて描いていくドラマだ。今年、来年、再来年と3年がかりで放送され、最後は日露戦争の勝利でおわる。

以降、※「少年の国」の虚構。※「明治」は戦争と植民地獲得の時代だった。※時代に逆行するドラマと続きます。

2010年は「韓国併合から100年」と

なる。その年をはさんで、3年がかりで「帝国主義の時代」を賛美、たたえるドラマを「プロジエクト・ジャパン」のメイン企画として放映する。鳩山首相が繰り返し「東アジア共同体」の形成を訴えるいま、日本国民の歴史認識を「帝国主義史観」で染めあげ、あらたなナショナリズムの高揚をはかるのである。思想上の重大事件ではないか？

《梅田正巳・書籍編集者》
※ 詳しくはホームページ
www.masrescue9.jp
でご覧下さい(編集部)



年会費納入・カンパを よろしくお願いします。

第5回 講演会

沖縄の歴史と憲法9条

講師

高橋哲哉さん

東京大学大学院教授・哲学者
著書:『心と戦争』『歴史/修正主義』『靖国問題』

2010年6月26日(土)

13:30-16:00

コンパルホール
大分市府内町1丁目5-38

問合せ 0977-84-2257

講演会終了後
「宗教者9条の会」総会を行います

宗教者9条の会・大分事務局

〒879-5102 由布市湯布院町川上3561 見成寺

TEL 0977-84-2257 FAX 0977-84-5203

年会費 3,000円 郵便振替口座 01720-1-111731

超宗派仏教研修会

『長老にお尋ねします』
日本仏教のこれからを考える

アルボムッレ・スマナサーラ長老
上座仏教長老・NHK教育テレビ「こころの時代」出演。
朝日カルチャーセンター講師など各方面で活躍。
著書多数。

今こそ、仏教の本来の姿とは
どういうものなのか、根本を問う

2010年(仏歴2553年)

5月17日[月]

10:00-16:30

覚正寺

大分県速見郡日出町豊岡

問合せ 0977-72-2905

参加費無料

世話人(◎代表者)

- 無着成恭 曹洞宗 泉福寺
- 酒迎天信 日本山 妙法寺
- ◎日野詢城 大谷派 見成寺
- 林 正道 大谷派 安養寺
- 西郡 均 本願寺派 誓岸寺
- 古谷 聡 大谷派 蓮照寺
- 佐々木淳二 大分メノナイトキリスト教会
- 掛橋泰定 日蓮宗 妙栄寺
- 大在 紀 本願寺派 長光寺
- 野口春夫 日本基督教団津久見教会
- 永井一匡 アライアンス大分キリスト教会